

令和 6 年 5 月 4 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10288

研究課題名（和文）消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Perioperative Health Literacy Support Program for Gastrointestinal Cancer Patients

研究代表者

森本 紗磨美（Morimoto, Samami）

高知県立大学・看護学部・助教

研究者番号：10457939

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー支援看護プログラムを開発することを目的に本研究を実施した。まず、消化器がん患者を対象とし、消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシーの内容を明らかにした。次に消化器外科患者の看護を実践している看護師を対象とし、消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシーを発揮するために実施している看護支援の内容を明らかにした。今後は患者、看護師から得られたデータより周術期ヘルスリテラシーの内容、看護支援を再分析しプログラムの試案を作成する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

消化器がん患者が有する周術期ヘルスリテラシーの内容、術前、術後における周術期ヘルスリテラシーを明確化したことで、患者がどのようなことから自分を捉え行動しているかを理解することが可能になった。また看護師が実施している看護支援より患者が周術期ヘルスリテラシーを発揮するための看護支援への示唆を得ることができた。COVID-19の影響もあり、プログラムの開発まで至ることができなかった。しかし、患者の視点での周術期ヘルスリテラシーの明確化により、患者の視点を加えた看護支援を検討することが可能になり、現在実施している周術期ヘルスリテラシーを発揮するための看護支援をより発展させることが可能になったと考える。

研究成果の概要（英文）： This study was conducted to develop a perioperative health literacy support nursing program for gastrointestinal cancer patients. First, the study targeted gastrointestinal cancer patients to determine the content of perioperative health literacy of gastrointestinal cancer patients. Perioperative health literacy was also identified for the preoperative and postoperative periods. Next, nurses who practice nursing care for gastrointestinal surgical patients were asked to identify the nursing support they provide to gastrointestinal cancer patients to demonstrate perioperative health literacy.

We will reanalyze the content of perioperative health literacy and nursing support based on the data obtained from patients and nurses, and create a draft of the program.

研究分野：急性期看護学

キーワード：周術期 ヘルスリテラシー

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

手術患者の多くは手術前日に入院し、手術侵襲からの回復とともに退院する。がん患者の多くは術前から不安を抱え(小笠ら, 2015)、術後の生活にも不安を抱えながら回復に向けて主体的に取り組まなければならない状況にある(本末ら, 2017)。このような状況の中でがん患者は、周術期を通して、手術や手術までの準備、術後の生活など周術期に関連する様々な情報を入手し、それを活用しながら対応していく能力を発揮する必要がある。ヘルスリテラシーが低いと患者は治療遂行が十分でなく(Chew LD et.al, 2004)、術後在院日数の長期化をもたらすという報告もあり(Wright JP et.al, 2017)、ヘルスリテラシーは手術のみならず術後の生活にも影響を及ぼす。そのため、術前から継続して周術期にヘルスリテラシーを発揮できるように支援することが求められる。

しかし、入院期間の短縮などにより、看護師は周術期の患者に応じた介入や支援を十分に行うことができていないことを感じている(小笠原ら, 2013)。周術期には、手術を乗り越えるための準備をし、術後回復を促進するための行動を主体的にとり、手術を受けた身体を調整しながら生活する能力が必要であり、その能力を周術期ヘルスリテラシーと考える。術前から周術期ヘルスリテラシーを支援することにより、手術や術後の生活調整に対する主体性を高めることが可能になると考えられる。手術を乗り越え、術後の生活をマネジメントできるためには周術期ヘルスリテラシーを高め、発揮していくことが重要であり、そのための看護支援を明らかにすることが必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、周術期にある消化器がん患者のヘルスリテラシーに合わせた看護援助を行うため、消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー支援看護プログラムを開発することである。そのため、以下の目標を設定した。

- ・目標 周術期ヘルスリテラシーの把握を行い、患者に必要な介入や不足している内容、重点的に必要な支援を明確化するために、患者の視点から周術期ヘルスリテラシーの内容や発揮場面、阻害要因、促進要因を明らかにする。

- ・目標 周術期ヘルスリテラシーを発揮することに貢献できるよう、看護師の視点から行っている支援や看護をする上での困難、大切にしていること、意図的なかかわりなどを明らかにする。

- ・目標 実用可能性のあるプログラム作成のため、目標 で明らかになった内容を整理、構造化、統合する。術前外来開設施設でのヒアリング内容を参考に支援プログラムの試案を作成、検証、洗練化し、実用可能性のあるプログラムを作成する。

3. 研究の方法

1) 目標 消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシーの明確化

A 県の地域連携拠点病院で研究協力に同意の得られた患者を対象に、面接法を用いてデータ収集を行った。データ収集は文献検討に基づき作成した半構成的インタビューガイドを用いて、研究対象者の希望する日時、場所にて 60 分程度の面接実施を実施した。目標 に対する研究実施に際しては、所属施設における研究倫理委員会の承認および研究協力施設の臨床研究審査委員会の承認を得て実施した。

2) 目標 消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシーを発揮するための看護支援の明確化

急性期病院、地域連携拠点病院で、消化器外科外来、消化器外科病棟など術前から患者と関わる部署に所属した経験、または現在所属している 5 年目以上の看護師を対象に、面接法を用いてデータ収集を行った。データ収集は文献検討や目標 で明らかになった周術期ヘルスリテラシーの内容を基に作成した半構成的インタビューガイドを用いて実施した。COVID-19 感染拡大の影響により、研究計画の変更、中断が余儀なくされた。そのため目標 では機縁法を用いて研究対象者を募ったことより研究対象者数は限定された。目標 に対する研究実施に際しては、所属施設における研究倫理委員会の承認および研究協力施設の臨床研究審査委員会の承認を得て実施した。

3) 目標 実用可能性のあるプログラムの作成

COVID-19 感染拡大の影響により目標 が遅延したこと、また COVID-19 感染予防対策のため活動が制限されたことより、術前外来開設施設でのヒアリングは断念した。そのため目標 、目標 より明らかになった周術期ヘルスリテラシーの内容、看護支援を再分析し支援プログラムの試案を作成することとし、現在、目標 で明らかになった周術期ヘルスリテラシーの内容の再検討、文献検討を行っている。今後、目標 で明らかになった看護支援の内容と照らし合わせ、支援プログラムの試案の完成を目指す。

4. 研究成果

1) 目標 消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシーの明確化

消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシーの内容を明らかにするために、A 県内の急性期病院で胃または腸の手術を受けたがん患者 8 名を対象に面接法を用いてデータ収集を実

施した。研究対象者は男性3名、女性5名、また、手術部位は胃1名、大腸3名、直腸4名であった。

周術期ヘルスリテラシーの内容に注目して質的記述的に分析を行った結果、【身体の異常に気づく】ことや【医療者の説明を自分なりに理解する】こと、【自分の状態が自分で分かるよう動く】ことによって自分のこととして手術を捉えることが明らかになった。また、すでに【知識として得ていることと自分の状態を照らし合わせて評価する】ことが明らかになった。術前においては【自分で手術へ向かうことができる生活を組み立てる】ことや【術前から術後の状態を予想する】ことを行っていたことが明らかとなった。

研究対象者の語りを術前と術後に分けて質的記述的に分析を行った結果、術前は【症状の評価をする】【必要な情報を手繰り寄せる】【医療者の説明から掴む】【医療者の反応から感じ取る】【自分のこととして捉える】【手術のためにすべきことに取り組む】ことが明らかになった。術後は【周囲のひとから情報をもらう】【自分に起きることを予測する】【自分のこととして捉える】【自分なりの工夫で回復のために取り組む】【健康管理のための調整を図る】ことが明らかになった。

周術期ヘルスリテラシーの内容、術前、術後における周術期ヘルスリテラシーから、術前、術後それぞれの時期にのみに該当するものや術前、術後と時期を分けることなく継続的にみられるものがあることが示唆された。

2) 目標 消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシーを發揮するための看護支援の明確化

術後回復に向けて周術期ヘルスリテラシーを發揮するための看護援助を明らかにするために、消化器外科病棟に5年以上所属した、または所属している看護師4名を対象に面接法を用いてデータ収集を実施した。研究対象者の看護師経験年数は12~28年、うち消化器外科病棟での経験は6~15年であった。

周術期ヘルスリテラシーを發揮できるように関わっている部分に注目し、質的記述的に分析を行った結果、【手術に関連した情報を自分のものできるように手術までに情報の補足を行う】【思い込みで回復を遅らせないように医療以外の個人的な情報源からの情報を修正する】【術後の身体に合わせて退院後の生活ができるように患者とともに今後の経過を整理する】【生活の中に取り入れることができるように必要になった対応について患者とともに整理する】【術後の状態を患者自身がイメージできるようにサポートする】【回復への取り組みを続けていけるように患者の持っている力を後押しする】【立ち止まることがないように反応をみながら行動の促しを行う】【家族が患者を支えることができるように家族への説明を選択的に行う】といった看護支援が明らかになった。これらのことより、患者のもつ情報認識への看護支援、患者が状況に応じた行動をとりいれるための看護支援、患者の「できる」を支えるための看護支援が示唆された。

3) 目標 実用可能性のあるプログラムの作成に向けて

目標 で明らかになった周術期ヘルスリテラシーの内容の再検討を行うため、ヘルスリテラシーの「情報を入手し評価する(福田ら, 2017)」点に注目し再分析した結果、手術のための情報を得て理解する内容として【身近な人の経験と自分を重ね合わせて手術が必要だとする】【下血や排便の変化を経験やこれまでの経過から正常か異常かを判断する】【医療者からの情報をもとに病状を振り返る】【自分のこととして理解を深めるために医師の説明に追加して調べる】など得られた情報をどう捉えるか、そこから自分の状態をどう捉えるかに関連した内容があることが示唆された。また、ヘルスリテラシーの「活用する(福田ら, 2017)」に注目して再分析を行い、【手術に影響をきたさないよう体調を整える】【日常生活に合併症予防行動を組み込む】【術後の経過を予測することで回復へ向けて立ち向かう】など今後の見通しを持って行動している内容があることが示唆された。

引き続き周術期患者の持つ周術期ヘルスリテラシーに注目し、患者が術前術後を通して周術期ヘルスリテラシーを發揮するための看護支援について目標 で明らかになった内容を照らし合わせ、患者の視点での看護支援を検討し、周術期ヘルスリテラシー支援プログラムの作成に向けて継続的に取り組む。

引用・参考文献

- ・ Chew LD, Bradley KA, Flum Dr, et al. (2004). The impact of low health literacy on surgical practice, The American Journal of Surgery, 188(3), pp250-253.
- ・ 福田洋, 江口泰正 (2017).ヘルスリテラシー - 健康教育の新しいキーワード - . 修館書店 . p4-6.
- ・ 小笠美春, 當目雅代, 野口英子 (2015). 麻酔科術前診察受診時における入院前待機手術患者の健康関連QOLおよび不安・抑うつ状態の特徴, 日本クリティカルケア看護学会誌, 11(1), pp53-62.
- ・ 小笠原春香, 大木友美, 井原緑 (2013). 消化器がん術後患者への食事指導の実際と看護師の認識, 昭和大学保健医療学雑誌, 11, pp80-86.
- ・ Wright JP, Edwards GC, Goggins K, et al. (2017). Association of Health Literacy With Postoperative Outcomes in Patients Undergoing Major Abdominal Surgery, doi:10.1001/jamasurg.2017.3832

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 森本 紗磨美、大川 宣容、田中 雅美	4. 巻 72
2. 論文標題 消化器がん患者が周術期ヘルスリテラシーを発揮するための看護援助	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 高知県立大学紀要 看護学部編	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森本 紗磨美
2. 発表標題 消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシーを発揮するための看護援助
3. 学会等名 第37回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森本 紗磨美
2. 発表標題 消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー
3. 学会等名 第34回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大川 宣容 (Okawa Norimi) (10244774)	高知県立大学・看護学部・教授 (26401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 雅美 (Tanaka Masami) (50784899)	高知県立大学・看護学部・助教 (26401)	
研究分担者	井上 正隆 (Inoue Masataka) (60405537)	兵庫医科大学・看護学部・准教授 (34519)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	畑山 峰 (Hatayama Mine)	高知県・高知市病院企業団立高知医療センター・看護局	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関